地方自治と学校教育に相互効果を生む修学旅行

全国修学旅行研究協会 中西朗理事長に聞く

地域と学校の一体作業

観光の「観」は〝みる〟〝みせる〟

修学旅行は学生時代の貴重な思い出として語られることが多いが、実は人間としての自己形成に果たす役割ははるかに大きい。また、時代によって修学旅行の内実も行動パターンも移り変わる。見学中心の団体行動からグループ行動、そして現在は体験学習へとシフトしたが、旅行形態が変化しても、学校行事として大きな意味合いをもつことに変わりない。全国修学旅行研究協会の中西朗理事長に、学校と受け地の両面から修学旅行の課題を聞いた。**(聞き手―本社編集委員・泉朝雄)**

プロフィール
中西　朗(なかにし・あきら)1932年東京生まれ。東京芸術大学卒業。東京都法律中学校勤務、1992年退職。その間、全日本中学校長会長などを歴任。財団法人教育調査研究所研究部長などに勤務。2002年同協会理事長に就任。

――地方自治の確立と修学旅行の改善とは、どのような意味だろう。

中西　道州制をはじめ地方自治への関心が高まっている。それは、政治の地方化だけでなく教育の地方化とも言える。まず、地域については、生き生きとした地域コミュニティづくりが大切だ。人間は一人で生きられないし、高齢社会が進めば互いに支え合う必要性はますます高まる。地域の全員が参画する社会が地域参画型社会なのだ。そこで求められるのは、モノの豊かさよりも心の豊かさだ。といって、地域に経済的なゆとりがなければ、それも難しいし全国で多くの地域がその課題を抱えている。そこで、どこに新しい経済波及効果を求めるかだ。そのときに観光交流空間の創造が大きな意味をもつだろう。

一方、子育てとは、学校も地域も家庭も一体となり、役割分担の下で育てていくものだ。そこで、地域に根差して開かれた学校、地域と共につくり上げようとする考え方とともに、学校の特色づくりが必要になる。それが、知識基盤社会における生きる力だろう。その中で学校の最大の役割として、しっかりと知識を教えることが求められる。知識をしっかり身につけるには、心を耕さないといけない。知識や知恵と感性を一体化させる教育が行われなければ樹木は育たないからだ。昨今では、ゆとり教育から基礎、基本の充実へと言われているが、逆に基、基本がさらに、単に体験するだけではなく、それを学習に戻し、さらに次の体験へ発展させるような学習方法が欠かせない。その1つが、修学旅行をはじめ各地での人間的な学びの展開となる。

――学校で修学旅行の話をすると、必ずと言っていいほど「観光旅行にならないよう配慮している」との言葉が出る。同様に、経験をしたことがないから関心を示さない事柄などは、体験が関心への大きな糧となる。最近では観光に対する認識も変わってきているのだが。

中西　修学旅行を通じて「旅」をどう考えるかということであり、観光の「観」について調べてみた(学研『漢和大辞典』)。1つは「みる」であり、もう1つは「みせる」という意味がある。現在の「観光」は、見物して歩く前者の「みる」が中心に捉えられている。中国の四書五経の1つ『易経』に「観国之光、利用賓于王」とあるのは「国の光を観(しめ)す」ことであり、それによって「王に賓たるに利(よろ)し」とある。観光とはこのことであり、修学旅行についてもこれを忘れてはならない。そうした視点で修学旅行を考えると、「このようなところを見たい、行いたい」という学校の一方的なプランだけでは十分と言えない。地域(旅行先)が地域の光をどのように観(み)せるかを考え、両者が一緒になって修学旅行に取り組むことで、意義ある修学旅行になると考えられる。学校が修学旅行に行くことは、地域の光(大切なもの)を観(み)て、生徒が自分なりに心の変化を見出すことだろう。地域の人の気持ちを考え、文化財を大切にする心、自然を守るといった修学旅行でなければ、修学旅行に行った意味が生徒自身に返ってこない。同様に地域の人々も、自分のところの「こんなステキな面を見せたい」という情報を発信しないと分かってもらえない。地域発の心を大いに発信してほしい。それが合体したところで新しい修学旅行先(あるいは形態)が開発できるだろう。修学旅行を通じてそうした気持ちを培っていきたい。

――学校の思いとは別に、生徒たちに地域の心を受けとめる訓練は行き届いているのか。

中西　学校での集団生活の訓練、そうしたことにかかわるディスカッションの機会は、決して十分と言えないかもしれない。学級指導がおろそかになってきたのも、その一端なのだろう。学級というのは、生徒と教師が一体になってつくられていくものだと思う。生活の基礎を考えるのは、道徳の時間ぐらいになってしまった。

そういう現状を踏まえたとき、地方のニーズとして、互いに刷り合わせることで、「テーマ旅行の展開方略」が見出せるはずだ。まさに、地域と学校が一緒になってSIT(文化や体験などによって知的好奇心を満たす旅行)に取り組むことだと言える。それが修学旅行地の開発が求められる理由であり、そのために学習のプログラム化が必要になってくる。

経済波及効果に注目を

地域発情報は貴重な学習財

――プログラム化をする上での基本的な要素とは何だろう。

中西　大きく区分すれば3つある。第1は自然や文化との触れ合いであり、自然探究や文化探究といっていい。第2は地域社会との触れ合いだ。単に見聞するのではなく、勤労体験として地域の産業を体験する意義は大きい。第3は人との触れ合いであり、人間的な交流や地域の生活を通した交流であり、農山漁村での民泊体験などを通して、そこに生きる人々と触れ合うこと。そうした触れ合いを学習目的に合わせてプログラム化し、修学旅行を展開することが望まれる。

――観光交流スポットやエリアをテーマでつないだ広域ルートの形成とは、具体的にどのような意味なのだろうか。

中西　修学旅行のプランを組み立てるには、個々の観光スポットを転々とするのではなく、面として捉えた行動が必要になる。したがって、地域観光を考える上では、単一の地方だけでは成り立たない。地域や県内といったたくくりではなく、もっと柔軟な発想で観光スポットエリアを、共通するテーマの下で結んだ恒久的なルートを形成していかないと、学習目的に合わせたプログラムができなくなる。

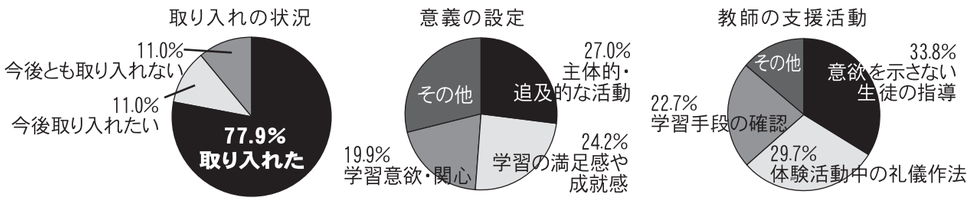
つまり、学校の側からみると、修学旅行の基盤整備としては、修学旅行の目標値の設定、共創プログラムの立ち上げ、地域情報の収集、学習知から体験知の転移といった大きな課題がある。とりわけ目標値では、学習的価値、集団的価値、感性的価値が並存しなければならない。目標値という言葉が堅苦しければ、「修学旅行に行ったら、こんな体験ができる」と、教師が生徒に対して熱く語れるようでなければ、価値が伝わらない。また、目標値を理解させる学習財(材)は、教師が与えるものだ。学習財とは、どうすれば分かりやすいかを砕いて説明するもの。例えば、三角形の重心は、三角形の頂点とその対辺の中点を結ぶ3つの線が1点で交わる点のことで、これを教えるのが目標値だ。だが、この説明だけでは分かりにくい。そこで三角形の板と楊枝を用意してやるのが学習財。あれこれ試しているうちに、楊枝の先端で板がバランスをとれる1点があることに気付く。その感動を共有し、熱く語ることで学習知と体験知も融合する。

――受け地の側では、どう対応したらいいのだろうか。

中西　受け地の側には、観光・交流基盤の整備という大命題が横たわっている。一つは観光資源や観光素材の開発であり、そのほか誘客促進対策などの事業展開、観光に携わる人材の育成、地域教育の振興など課題は山積している。その場合の情報発信でも、目標値に対する学習財と同様に、好奇心や疑問、予知につながる工夫が欠かせない。つまり、ここでの学習財は、生徒たちがそこでの体験に意欲が膨らむもの。いわば、フクラシ粉のような役割を果たすもので、思考、判断、表現の財になるものだ。言い換えれば、子供たちが成長する時の栄養素になるものにしてほしい。したがって、地域と学校が互いのニーズを合体させることで、意義ある修学旅行が形づくられる。そして、地域にとって修学旅行の受け入れは、経済面の波及効果だけでなく、旅行という観点からみれば、大人になってからのリピートも視野に入れることが可能だろう。私は、旅は人生の句読点であり、修学旅行は旅の出発点だと考えている。

体験学習にかかわる各校の状況

(依頼数:全国中学校3147校、回答校:2660、回答率:84.5%)



体験学習の内容分類

歴史文化体験	歴史文化遺産体験 生活歴史文化体験	環境保全共生体験	自然環境体験 生活・社会環境体験 地球環境体験
社会体験	一般社会・職場体験 福祉・ボランティア 平和学習 国際社会体験 進路選択体験 生活文化体験	交流体験	学校交流体験 宿泊体験
		自然・スポーツ体験	陸 海・湖・川 空